

## 映画による地域活性化を探るシンポジウム

### ( 要 旨 )

#### ○基調講演 「映画を核とした地域活性化について」

映画プロデューサー 椎井 友紀子 氏

映画プロデューサーの仕事は、企画を考えることから始まる。次に、原作を映画化する権利の取得や企業などから資金集め。そして、スタッフリングといって監督、カメラマンなどの選定を行い、脚本家をたてて台本を作る。その台本を基に主役を依頼する方と交渉するキャスティングに移ることになる。撮影を地方で行う場合は、地元関係者との交渉も必要になるが、その際、窓口となる機関（フィルムコミッションなど）があると助かる。仕上げに音楽の製作。最後に重要なのが宣伝だが、エキストラなど映画に協力いただいた方の口コミの影響がとても大きい。プロデューサーとしては、公開初日に多くのお客さんが入るか考えると、とても胃が痛む。

映画のロケセットは、通常は撮影が終われば取り壊してしまう。もったいないが映画の運命でもある。庄内映画村のようにセットを地域に残して活性化に使うという手法は、地域でみられるようになってきた。例としては、京都太秦や日光江戸村、茨城など。

本日の演題は「映画を核とした地域活性化」だが、はたして映画が地域活性化につながるのか。

映画ロケの業務は、人のつながりで発注することが多く、一部の人だけになりがち。映画は一部の方々には影響を及ぼすが、その効果が地域に万遍なく行き渡るようには、なりにくい。

映画人は、撮影が終わったら帰ってしまう。撮影すればそれで良い。地元のFC（フィルムコミッション）は撮影が来たときは盛り上がる。しかし、ロケ隊が去ったあと、次に地域でどうしていくのか、が一番大切だ。

これまで、各地で映画のプロデュースを行ってきて、地域でいろいろな問題も見てきた。地元の有力者と、対立する有力者がいて、映画をきっかけとして問題が生じることもあり、映画撮影で地域に入ってきて良かったのかと思うこともあった。

いろいろな問題が生じて、それをまとめていける人、リーダーであり調整役、ネゴシエーター（映画でいえばプロデューサー）が必要だ。その人が、いかに地域の活性化に取り組むかが重要となる。

映画は楽しくて面白くてお祭りのようなもの。お祭りが終わった後、さみしくなる。しかし、お祭りの実行委員、応援した人、参加者が地元に残り、地域で活性化の取組みを行い続けることが大切だ。

映画は、その時期の社会背景なくして作れないと思っている。映画プロデューサーは、映画関係者以外の様々な人と話す機会が多い。多くの方から、映画は皆に夢を与えなく

てはならないと言われる。しかし、社会の皆さんの気持ちと合致する映画がなかなか作られなくなっている。私自身は在宅介護をしながら仕事を続けているが、知人には地方に親を残して東京で仕事をしている人も多い。そのような課題を扱った作品など、映画で夢物語だけを語るのではなく、実生活の実情を反映させなければならない。

長野県の大鹿村で次の映画撮影に取り組んでいる。大鹿村は、300年間、歌舞伎の文化が伝承されているところで、戦時中も女性たちが続けて守り続けてきた。竹下首相時代のふるさと創生事業1億円のうち、皆の財産である歌舞伎のために6,500万円使ったところ。地域の人々が大切に残してきたものに使っている。映画では、行政の施策に対して賛成派と反対派が対立する中で、歌舞伎という心をついにできる活動を通じて乗り越える、村人の心意気で跳ね返す、そのようなものを表現したい。

活性化について大事なことは、地元の人達が何を本当に望んでいるのかだ。独りよがり押し付けるのはダメ。それは映画も同じである。また、Aさんがやっているからダメ、とか、Bさんの提案だから良い、というのではなく、それを乗り越えて活性化に取り組んでほしい。映画がそれらを繋ぎとめることができれば素晴らしい。

一番大切なのは、人材である。会社では規模の大小関係なく、一人の牽引する人がいれば成り立つ。

原 丈人（はら じょうじ）さんという慶應義塾大学出身の会社社長がいる。考古学の研究を志し、その資金集めに29歳のときにアメリカで光ファイバー事業を起業した方。原さんは、自分の会社で得た利益を、周りの会社に還元していくことを目指している。そのために何ができるかを考えている。さらに、先進国が貧困の国に対して無条件で資金を貸し出し、自力で成長することを支援するシステムを提言している。アメリカの金融資本主義に未来はない、自国だけでなく周りの国が成長するために自国で何ができるか考える公益資本主義であるべきことを、長年主張している。

巢鴨信用金庫の理事長である田村和久さんは、現職就任後にいくつかの改革を行った。例えば、午後3時に終わる窓口業務を、午後7時まで相談窓口として開放した。第2、第4日曜日に会社の会議室を開放し、地域を訪れる人々にお茶飲みの場としたり、近隣の会社の制作作品の展示会場として提供した。会社どうしの出会いの場所として繰り返すうちに、近くの企業同士が結びつき、新商品の開発にまで至った。地域の人々が何を望んでいるかを考えて提案する。お金をかけることではなく、意識を転換することでこのようなことが出来る。これはまさにプロデューサーである。まとめ役、プロデューサー、ネゴシエーターが映画と同様に地域にとって重要である。

プロデューサーは外交官でもある。最近、各国間の問題が生じている。国どうしで解決が難しいことを調整するのが外交官の役目だが、地域にとっても、調整役、ネゴシエーターとなる人材が重要である。

#### ◇会場から質疑

- ・ 映画は監督が変われば作品の内容が違ったものになる。時には原作者の想いと違う形になる場合もあるのか？

→ それが監督の個性というもの。10人の監督がいれば10通りの映画ができる。原作者の想いはあるが、映画作品として作られたら、それは映画監督の想いとなる。

- ・ 「座頭市 THE LAST」の評判が思ったより良くなかったが。

→ 座頭市は、勝新太郎のイメージが強く残っている。しかし、同じ作品だったら作る意味がない。今回の作品は、評判は別として良い映画だと自負している。10年後にもう一度作品を見て欲しい。

- ・ 庄内のことは好きか？また、活性化のポイントは？

→ 庄内は大好きで、こちらにスノータイヤを保管してもらい東京とよく車で行き来している。活性化には人材が一番に重要。困った人がいると見過ごすことができないなど、庄内人の気質がある。いろんなことを受け入れてエネルギーに変える気質がある地域だと思う。

- ・ 映画作品によって、地元の方言(庄内弁)を使う場合と共通語で話す場合があるが、どのように使い分けているのか？

→ 原作と制作する映画作品の内容から判断する。

- ・ 社会背景をもとにした映画の製作という話があったが、公益性という観点では商業ベースに乗らない映画製作もありうるのか？

→ 映画プロデューサーは、映画をヒットさせることが仕事。商業ベースで事業として確立させることが大前提である。商業ベースであろうが社会背景を反映した映画作品は、10年後、20年後に観てもらえば理解してもらえると確信がある。

- ・ 活性化には人材が重要との指摘をいただいたが、その元になる映画の活性化を考えた場合、日本映画は厳しい状況にあると思う。映画を活性化させるには何が必要か？

→ 映画業界の中で若手の監督は育っている。しかし、プロデューサーは成り手が少ない。理由は仕事がお金にまつわるから。プロデューサーは最後まで責任を負わなければならない。赤字になれば何とかしなければならない。映画の活性化では、プロデューサーの人材育成が課題。